

2020年2月2日

福音書からのメッセージ

シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。（ルカによる福音書2章28節）

本日は2月2日、被献日です。今日の聖書には、「神殿でささげられる」という小見出しが付けられています。イエス様が神殿でささげられたということを感じる日です。

赤ちゃんが神殿でささげられるという光景は、お宮参りを連想させます。わたしたちの教会の隣の御香宮神社にも、毎年たくさん赤ちゃん連れの方々が参拝しにいきます。しかし、ささげるといっても、赤ちゃんはお宮さんでそのまま奉公させられるのではなく、ちゃんと無事に家に帰っていきます。イエス様のときもそうでした。ユダヤでは、最初の男の赤ちゃんは神さまのものとされていました。そしてお母さんの清めの期間が過ぎたら、神殿にささげに行く決まりになっていました。だからといってその赤ちゃんがそのまま神殿に居続けたかという、そうではありません。律法で決められたささげ物、山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をささげることによって、その義務を果たしたことになったのです。

この「神さまにささげる」ということについて、少し考えてみたいと思います。礼拝(聖餐式)の中に、「奉献」というところがあります。平和のあいさつが終わり、聖歌を歌いながら献金を集める。わたしたちの中ではそのイメージが強いかもしれませんが、そこにはもっと大きな意味があります。まずパンとぶどう酒が、会衆席の後ろから運ばれてきます。そして聖卓の上に運ばれ、集められた信施とともに神さまのために用いられていく。しかし用いられるのはそれだけではありません。

続く感謝聖別の中で、わたしたち自身を



もささげられ、神さまどうぞ用いてくださいと祈るのです。わたしたちは聖餐式の中で、イエス様の十字架の犠牲

を記念します。そしてその犠牲に連ねられて自らをささげ、その犠牲の実にあずかる。そのことをわたしたちは毎週の礼拝の中でおこなっているのです。

そう思った時に、わたしたちは本当に、神さまのためにこの身をおささげしているのだろうかと思うことがあります。自分の思いや私利私欲、神さまのことではなく人間のことを優先させて過ごしてはいないのだろうかと思えます。

イエス様が神さまのみ心のままに十字架に向かわれ、わたしたちのために犠牲のささげ物としてささげられたように、わたしたち一人一人もまた、自分自身を神さまの前に差し出すことができるのだろうか、考えていきたいと思えます。

幼子イエス様が神さまにささげられたこと、当時は単にユダヤ教の儀式としておこなわれたことかもしれません。しかしイエス様が十字架によって自らをささげられたことは、神さまの大いなるご計画の中でなされたことです。

わたしたちもまた、神さまに用いてもらえるように祈りましょう。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>